

めいぼくせんだいはぎ
まさおかちゆうぎ

伽羅先代萩 政岡忠義の段

〔解説〕天明五年（一七八五）正月、江戸結城座初演。松貫四（まつかんし）・高橋武兵衛・吉田角丸（よしだつのまる）作。九段続きの時代物。先行の歌舞伎作品に「伊達競阿邦劇場（だてくらべおくにかぶき）」などを加えて浄瑠璃化されたもの。仙台藩・伊達家のお家騒動を取り扱った作品としては最も有名。芝居でも度々上演され、特に忠義と親子の愛情の板挟みになる乳母政岡を描く六段目「御殿の段」は聴く者の涙を誘います。六段目の前半は俗に「飯炊（ままた）き」、後半は「政岡忠義（まさおかちゆうぎ）」と呼ばれています。

〔あらすじ〕奥州城主の義綱は、吉原の遊女高尾に入れあげて国を顧みないために隠居を命じられ、幼い鶴喜代（つきよ）君が跡目を継いでいました。しかし、この機に乗じてお家乗っ取りを企てる仁木弾正（にきだんじょう）一味に命を狙われ、鶴喜代君の乳母政岡（まさおか）は、用心のため若君を病氣と称し人々の出入りを制限、我が子千松（せんまつ）をお毒味役にし、食事もすべて自らで整えていました。

〔政岡忠義の段〕梶原景時の妻、栄御前（さかえごぜん）が頼朝公からの見舞いと称し、毒入りの菓子を持って現れます。栄御前が頼朝公からの菓子が食べられぬのかと、鶴喜代君に食べさせようしたところ、千松が走り出て食べてしまいました。千松は毒に苦しみ始めますが、それを見た一味の八汐は、悪事が露見するのを恐れて、すぐさま千松を刺し殺してしまいます。政岡は、お上へ無礼を働いた千松は、成敗されても仕方がないと言って、悲しみを押し隠します。栄御前は、八汐の働きを褒めて帰って行き、一人になった政岡は、千松の遺骸を抱きしめ悲嘆にくれるのでした。

襖押開かせ梶原平三景時の奥方、夫の權威に榮御前、しとくくと座に直り

「オ、どれくも出迎ひ大儀、自ら今日来りしは、

右大将よりの御上使、夫景時承はれども義綱の一子鶴喜代、病氣によつて男たる者を禁じたと聞きし故、夫に代るこの榮、義綱隠居のその後、鶴喜代の所勞ことに食事も進まぬ由、御心を付けられしこのお菓子、頼朝公より下され物、有難く頂戴あれ」

と持たせし菓子箱。差出せば、八汐引取り

「コレハく有難い大将よりの下され物。サアく

申し若殿様、早う頂戴遊ばしませ」

と蓋押開き

「テモマア見事、結構なこのお菓子、イザ召しませ」

と差出す。さすが童の嬉し気に、立寄り給う鶴喜代

君

「ア、申し御前様、またその様なさもしい事、御病気の御身なればお毒になつたら何となさるゝ、こつちへお越し」

と政岡が詞、打消す榮御前

「ヤア頼朝公より下さるゝ御菓子、何疑ふて頂戴させぬ。是非この榮が食べさせる」

「アイヤそれでも」

「ム、但し頼朝公の仰せは背いても苦しいか」

「サアそれは」

「サア」

「サア」

「サア」

「サアくくく」

と権柄押し。奥より走つて千松が

「その菓子ほしい」

と引摺み何の頑是も唯一口、八汐がびつくり、栄御前、毒の工みの現はれ口、忽ち惱乱、目を見詰め蹴散らかしたる折は散乱、八汐はすかさず千松が首筋片手に引寄せて、懐劍ぐつと突込めば、わつと一声七転八倒、驚く沖の井、政岡が仰天ながら一大事と若君抱き、わが部屋へ押やり参らせ、戸口に付添ひ守りゐる

「ヤア何をざわ／＼騒ぐ事はないわいの。忝けなくも頼朝公より下されしこの折、踏破りしは上への無礼、小さい餓鬼でも、そのまゝには差置かれぬ。それ故に手にかけては、お家のお為を思ふ八汐が忠節、ム、ハ、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。オ、可哀そうに可哀そうに痛いかいのう／＼他人のわしさへ涙がこぼれる。コレ政岡殿、現在の其方の子、悲しうもないかいの」
「何のマアお上へ対して慮外せし千松、御成敗はお

家の為」

「ム、スリヤこれでも此方は何ともないかや、これでもかこれでもか」

となぶり殺しに千松が苦しむ声の肝先へこたゆる辛さ無念さを、じつとこらゆる辛抱は、ただ若君が大事ぞと涙一滴目に持たぬ男勝りの政岡が忠義は先代末代まで、またあるまじき烈女の鑑、いまにその名は芳しき。栄は始終、政岡がそぶりに気を付け打ほゝ
笑み

「オ、でかした八汐、右大将より鶴喜代へ下さるゝ大切のお菓子、小倅めが出しやばつて、すつての事に大事の工みイヤアノ大事の菓子を荒らした科、殺したは八汐が働き、さすが渡会銀兵衛が妻ほどある。政岡には自らが言ひ聞かす事もあり、沖の井、八汐両人は暫く次へ間を隔て遠慮召され」

と栄が詞、何と違爰も沖の井が深き心も和田津海の、
汐の八汐も打連れて、伴ひ一間へ入りにける

後先き見廻し栄御前、政岡が傍にすり寄つて

「年ごろ仕込みし其方の願望、成就してさぞ喜び」

「エ、何とおつしやる」

「ア、イヤ、モ隠すに及ばぬ。東西分ぬ内よりも、取

替へ置きし其方の子の鶴喜代が身に恙なう、義綱の

誠の倅千松がこの最期、さぞ本望であらうのう」

「エ、」

「才、取替子の様子は先立つて知つたれども、もし

やと思ひ最前から窺ふて見る処、血縁の子の苦しみ

を何ぼ気強い親々でも、耐へられるものぢやない。

若殿にしておく我子が大事、其方の顔色変らぬは取

替子に相違はない、スリヤ皆心は同腹中、刑部殿と

も内談しめ諸事わが夫の差図あらん、まづ今日は立

帰り病氣の様子申上げん、必ず何事も人に悟られま
いぞや」

と一人呑み込み、悠々と館をさして帰らるゝ

後には一人政岡が奥口窺ひくゝて、わが子の死骸抱
き上げ、耐へ耐へし悲しさを一度にわつと溜涙、せ

き入、せき上げ嘆きしが

「コレ千松、よう死んでくれた、出かしたナ、其

方が命捨てた故、邪智深い栄御前、取替子と思ひ違

へ、己が工みを打明しは親子の者が忠心を神や仏も

哀れみて、鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか。

ハ、ハ、有難やく。これと言ふのも、この母が常々

教へておいた事、幼な心に聞分けて手詰めになつた

毒害を、よう試みてたもつたのう。オ、出かしやつ

た出かしやつた、其方の命は出羽奥州五十四郡

の一家中、所存の臍を固めさす誠に国の礎ぞや。と

は言ふものの可愛やなア、君の御為かねてより覚悟

は極めてゐながらも、せめて人らしい者の手にかゝ

つても死す事か、素性賤しい銀兵衛が女房づれの刃

にかゝり、なぶり殺しを現在に傍に見てゐる母が気

は、どの様にあらうまどうあらう。思ひ回せばこの

ほどから歌ふた唄に『千松が七つ八つから金山へ、

一年待てどもまだ見へぬ、二年待てどもまだ見へぬ』

と唄の中なる千松は待つ甲斐あつて父母に顔をば見

する事もあらう。同じ名のつく千松の其方は百年待

つたとて千年万年待つたとて、何の便りがあるぞい

の。三千世界に子を持つた親の心は皆一つ、子の可

愛さに毒なもの食べなど云ふて呵るのに、毒と見へ

たら試みて死んでくれいと云ふ様な、胴欲非道な母

親が又と一人あるものか。武士の胤に生れたは果報

か因果かいじらしや、死るを忠義と云ふ事は何時の

世からの習はしぞ」

と凝り固まりし鉄石心、さすが女の愚に返り人目な

ければ伏し転び、死骸にひしと抱きつき前後不覚に

嘆きしはことわり過ぎて道理なり

はですがたおんなまいぎぬ さかや

艶容女舞衣 酒屋の段

〔解説〕

安永元年（一七七二）大坂豊竹座初演。作者は竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民平七。美しい人情を描いた世話物の代表作です。中でもお園のクドキ「今頃は半七様どこにどうしてござろうぞ」はよく知られています。元禄八年、大坂千日前での赤根屋（茜屋）の半七と美濃屋の三勝（さんかつ）が心中した事件が歌舞伎となり、二十五年を経た享保四年、紀海音が『笠屋三勝廿五年忌』という浄瑠璃を創作しました。その後更に笠屋を実説美濃屋にし、半兵衛やお園を配した『女舞剣紅楓』の筋を受け、発展させたものがこの作品です。上中下三巻に分かれ、下の巻の、「上塩町の段」が「酒屋の段」となります。

〔あらすじ〕

大坂上塩町の酒屋「茜屋」に幼子を連れて女が酒を買いにあらわれ、子どもをおいて姿を消します。この店の息子半七は、お園という貞淑な女房がいるものの、以前から美濃屋の三勝という遊女となじみ、二人にはお通という子どももおりました。半七はふとした廓のいきさつで、人殺しの科人となってしまいます。半七の父半兵衛は、一度は息子を勘当したものの、不憫に思い、代官所で息子の罪を引き受けて縄にかかります。

一方、お園の父宗岸は、半七の不行跡に愛想をつかし、一旦はお園を実家へ連れ戻したものの、お園が悲しみに沈んでばかりいるので、再び嫁として迎えてくれるように半兵衛に頼みに来ます。お園は夫に嫌われるのは己の至らなさからと、ひとり寂しく半七の身を案じます。

そこへ置き去りにされた子どもが現れ、半七と三勝の娘お通であることがわかります。一同はお通の守り袋から出た書き置きを読み、半七と三勝の死の覚悟を知り、悲嘆の涙にくれます。二人は店の外でその様子をうかがい、万感の思いを残して去って行くのでした。

こそは人相の

鐘に散り行く花よりも、あたら盛りをひとり寝の、お園を連れて、父親が、世間構はぬ十徳に、丸いあたまの光りさへ、子ゆゑに暗む黄昏時。主の妻は灯をともし表を締めにいそくと、出合頭に

「ホ、これは、これは、宗岸様。そちらにゐやるはお園ぢやないか」

「アイ母様。お変わりもござりませぬか」

と言う挨拶もどこやらに疵持つ足の踏みどさへ、低き敷居も越えかぬる。宗岸は遠慮なく

「半兵衛殿お宿にか」

と娘を連れて打ちとほれば

「サア、先ずお上りなされませ」

と奥底もなき詞のうち、それと聞くより半兵衛が、一間を出づるしぶく顔

「娘を連れて去なれたからは、こちのうちに用はない筈。なんのためにござったこと」

と針持つ詞に、妻は氣の毒

「ア、コレイコレ親父殿ホ、ホ、ホ、イヤモ人様に追従言はぬ偏屈なちの人。必ずお氣に障へられて下さりますな、この間は嫁女の帰つてゐられまして、いかいお世話でござりませう」

「なんの、半兵衛殿の立腹は皆もつとも。三勝とやらに心奪はれ、夜泊り日泊りして女房を嫌ふ半七。所詮末のつまらぬことと無理に引立て去んだのは、娘にひけを取らすまいためおれが氣迷ひ。それから思案するにつけ、唐も倭も一旦嫁にやつた娘。嫌はれうがどうせうが、男の方から追ひ出すまで、取戻すといふ理屈はない筈。こりや宗岸が一生の仕損ひと、サ悔んでもあとの祭。園めも昼夜泣き悲しみ、朝夕も進まね

ば、もしや病ひが起らうかと、見てゐる親の心は闇
おれも天満に年古う住んでゐれば、人に理屈も言ふ者
なれど、サ誤りは詫びねばならぬと、年寄りの面押し
ぬぐうて来ました。モなにかのことは料簡して、今ま
でのとほり嫁ぢやと思つて下され。ヤコレ頼みます。
頼みます御夫婦」

と謝り入つたる挨拶に、園もうぢく手をつかへ

「とと様の一徹で、無理に連れられ帰りしが、一旦殿
御と極まつた半七様。嫌はれるは皆私の不調法、鈍に
生れたこの身の科、今から随分お氣に入るやうに致し
ませうほどに、やつぱり元の嫁娘とおつしやつて下さ
りませ。お二人様」

とあとは詞も涙なり

「フ、なんのママ、そつちさへその心なら、こつちは
変らぬ嫁姑、ナウ親父殿さうぢやないか」

「さうぢやない。昔唐にも例がある。太公望とやらい
う人の妻、夫に暇取り月日を経て詫言に來たりし時、
鉢の水を大地にあげさせ、その水を鉢へ入れよ。元の
ごとく夫婦にならんと、太公望が言はれたと、いつぞ
や講釈で聞いて來た。それと丁度同じこと。こなたの
方から無理暇取つて、今更嫁と思へとは、モ、モ、い
つまで言うても返らぬこと。口詞叩かずと、はやう連
れて去なつしやれ、エツ去なつしやれ」

とにべもしや／＼りも納戸口、顔を背けてあたりける
「サ、その腹立ちには尤／＼。ガ重々不調法は、
コ、このあたまに免じて料簡して、どうぞ嫁に」
「嫌でござる。件めは勘当したれば、嫁というべき者
もない筈」

「サそれも懲しめのため、当座の勘当」

「イヤ当座でない。七生までの勘当」

「ム、そのまた七生まで勘当した半七が代りに、こなたなんで繩にかゝつた」

「ヤア」

「サア半七とは親でも子でもないこなたが、けふ代官所でなんのために縛られて戻らつしやつた」

と思ひも寄らぬ宗岸が詞に、びつくり驚く女房。嫁もともども立寄つて、肌押し脱がせば半兵衛が、小手をゆるめし羽交締め

「ナウ情なやなにゆゑ」

と嫁はうろ／＼、女房も取付き歎けば、宗岸が

「イヤイヤまだ／＼驚くことがある。聾の半七は人殺し、サお尋ね者になつたはいの」

と聞くより二人はまたびつくり

「それはなにゆゑどうした訳。様子を聞かして、コレ／＼半兵衛殿」

と問へどもさらに返答は、差し仰向いて詞なし。宗岸涙の目をしばたき

「一昨日の晩山の口で善右衛門を殺したは、茜屋の半七と、噂を聞いた時は、驚くまいかびつくりせまいか。膝も腰も抜け果てしが、ア、思へば／＼不孝者。よい時に勘当さしやつて、親に難儀のか、らぬは、まだこの上の仕合せと、思つたは他人の料簡。違つたこなたの縛り繩、科極まつた半七が命、一日なりと延ばしたいと、人殺しの科を身に引き受け、繩かゝつたこなたの心は、真実心に子を思ふ親の誠と知れば知るほどア、コリヤ宗岸が仕損ひ。半七が身の難儀。こなたも勘当してしまひ、おれも娘を取戻したら、親にかゝる首綱もなく、よいことしたと世間から、褒める人もあらうが、親となり舅となるが、マ、／＼、大抵深い縁かいなう。かういふ仕儀になつた時は、褒めらるゝよ

り笑はれるが親の慈悲。片時もはやうと連れてきた心はの、一旦嫁におこしたれば、半七が嫌がるなら、ハ

テ尼にしてなとこのうちで、御夫婦の亡き跡の、香花

なりとも取らして下され。コレ手を合はして頼みます

／＼わいのふ。詫び言が叶はねば、引き離されたと突

き詰めて、短慮な心も出しをろかと、案じ過ごして夜

の目も合はず、ア、母親はなしたった一人。あいつを

思ふおれが因果。こなたの縄目も半七が、科人になつ

たらなほ可愛かる。たとへまた勘当が定でも、久離切

つたが誠でも、真実親子の肉縁は、切るに切られぬ血

筋の親。おれもこなたほどはなけれども娘は可愛い。

まして勘当はせぬ娘。愚痴など人が笑はうがおりや可

愛い不憚にござる。可愛い、可愛い／＼／＼ござるはいの

ふ。コレ聞き入れてたべ半兵衛殿」

とこれまで泣かぬ宗岸が、堪へに堪へし溜めだめをた

くしかけたる叫び泣き。我強う生れし半兵衛も、舅の
心根思ひやり

「ヲ、道理ぢや／＼、宗岸殿」

とあとは詞もないぢやくり。妻も、お園も一時に、四

人が涙高水に、樋の口あけしごとくなり。半兵衛涙の

うちよりも、持病の痰に咳入つて

「ゴホン／＼／＼／＼なにならなまでにまで気をつけて、

孝行にしたもる、こんな嫁を尋ねたとて、も一人と

あるものぢやない。世間の人の嫁鑑。半七がことは思

はぬが、そなたに別る、半兵衛はよく／＼の不仕合せ。

ア、去なせとむない、帰しとむないとは思へども、こ

つちに置けばこのまゝ若後家。おれはそれが可愛い、

いとしうおじやるはいの。それで詫び言聞き入れぬ。

了簡して呼び戻さぬ。コレ嫁女、必ずむごいと恨んで

ばしたもんなや。ア、一人の件はお尋ね者。あすより

誰を力にせうぞ。孝行にしたもつたが、今では結句恨めしい」

とせき上げ、咳入る舅の背、さするお園も正体なく伏し沈むこそ道理なり。半兵衛やうく顔を上げ

「言はねばならぬこともあれど、孝行な嫁女の手前、胸につまつて言ひにくい。宗岸殿。奥の間で言ひ明かさん。コレお園。そなたをさらく嫌ふぢやない。気にかけてたもんなや。舅殿へ話すうち、しばらくこゝに」

と三人はしをくく奥へ泣きに行く、心の内ぞ哀れなり

跡には園が憂き思ひ。かゝれとしてしも烏羽玉うはたまの、世の味気なき身一つに、結ぼれ解けぬ片糸の、繰返したる独り言

「今頃は半七様どこにどうしてござらうぞ。今更返ら

ぬことながら、私といふ者ないならば、舅御様もお通に免じ、子までなしたる三勝殿を、とくにも呼び入れさしやんしたら、半七様の身持も直り御勘当もあるまいに、思へばくこの園が、去年の秋の煩ひに、いつそ死んでしまつたら、かうした難儀は出来まいもの。お気に入らぬと知りながら、未練な私が輪廻ゆる。添ひ伏しは叶はずともお傍にゐたいと辛抱して、これまであたのがお身の仇。今の思ひにくらぶれば、一年前にこの園が死ぬる心がエ、マつかなんだ。堪へてたべ半七様、私やこのやうに思うてゐる」

と恨みつらみは露ほども、夫を思ふ真実心なほいや増さる憂き思ひ

「あすはとうからとと様に、またつれられて天満へいに、半七様のひよつとしたはかない便りを聞くなれば、思ひ死に死ぬである。とても浮世は立ぬ覚悟、嫌はれ

ても夫の内、この家で死ねば後の世のもしや契りの綱にも」

と最期を急ぐ心根は余所の見る目もいじらしし。

かゝる哀れも知らぬ子の泣き声に目や覺しけん、一間を出でて

「乳飲まう。乳が飲みたいおぼ〜」

とお園が膝に寄り添ふ子の、顔見てびつくり

「ヤアそなたは美濃屋のお通ぢやないか。こゝへはどうしておぢやつた」

と不思議ながらも抱き上ぐれば、半兵衛、宗岸、母親も、一間のうちを転び出で

「コレ〜嫁女、かたじけないその心。障子のうちで

聞きたびに、拝んでばつかりゐたわいの。礼言ふこともたんとあれど、心のせくはこの子のこと。美濃屋の

お通と言はしやつたは、半七と三勝の」

「アイ、お二人の中に出来た、お通といふはこの子じやわいな」

「ヤア〜親父殿。聞かしやつたか」

「ヲ、聞いてゐる。そのまたお通を、なんで捨て子にしてこちのうちへおこした。コリヤなんぞ訳があらう。

嬢、懐かどこぞにコウ書いたものでもないか。はやう尋ねて見や」

と言ふうちに、わくせき明ける守り袋、うちよりばらりと落ちたる一通。取る間遅しと封押切り

「何じや。書置のことと書いてある」

「ヤア〜コレ〜嫁女。そなたのよい目でちやつと読みや〜」

「アイ〜ナニ〜『十度契りて親子となる。父の御恩は山よりも高きとの世の教へ、わが身にも弁へをり

候へども、その御恩も得送らず、儘ならぬ義理にから

まれて、心にもあらぬ不孝の罪、御赦し下されたく候。
わけて母様の御養育』あゝまうしお前様のことが書いてござります。ようお聞きなされませえ」

「ヲ、よう聞いてゐます、よう聞いてゐますわいなう」
へ聞いてゐるさの障子より、洩れ出づる月は冴ゆれど
胸の闇

「エ、とツトモウ時も時と隣の稽古。そしてそのあと
はなんと書いてあるぞ」

「アイ』母様の御養育、海より深き御恵み、親父様の
御機嫌悪い時には、蔭になり日なたになり幾千万の
お心遣ひも、泡と消えゆくわが難儀。人を殺せし身と
なり候へば、思ひもつけぬ御別れ』エ、そんならやつ
ぱり半七様は」

「オイナウ嫁女。善右衛門を、殺しましたわいなう」
「ハア」

「あのまた善右衛門といふ奴は、大抵や大かた悪い奴
ぢやないわいの。あんな悪者でも喧嘩両成敗。わが子
の命を解死人にとらるゝと、思へば、宗岸殿。おり
や口惜しい。エ、惜しいわいの」

へ鴛鴦の片羽のとぼくと、子に迷ひゆく小夜千鳥む
ざんやな半七は、今宵限りの命ぞと、三勝伴ひしをし
をと、心にかかるわが子の顔、名残りにせめて今一目
と、ともに戸口に夜の鶴

こなたはお園がなほ涙。泣くく取上げ書置を読むも
はかなき世の中に

『女はその家に在りて、定まる夫一人を頼みに思ふ
者に候ところ、その頼みに思ふわれ等が身持、いつし
か愛想らしい詞もかけず、ついに一度の添い伏しもな
く候へども、その色目もいたさずして、夫大事、親た
ち大事と、辛抱に辛抱なされ候段、山々嬉しく存じま

あらせ候。今まですげなう致せしことも、さら／＼嫌ふではなく候へども、三勝とはそもじの見えぬ先からの馴染みにて、子まで設けし仲に候へば、互に退き去りもなり難く、それゆゑ疎遠にうち過ぎまゐらせ候。しかし夫婦は二世と申すことも候へば、未来は必ず夫婦にて候』ヲ、コリヤマア誠かいなあ半七様。ほんまのことでござんすかいな」

「コリヤ娘。未来は夫婦と書いてあるかい」

「アイ、未来は夫婦と書いてござんす」

「ヲ、それはマア、われがためにいつち良いことが書いてあるの。未来は未来ちやが、せめて一日なりこの世で女夫にしてやりたいわい。なんとしてもマアこの半七は、善右衛門を殺しましたぞ。ドレ／＼娘。もちつとぢや。おれが代つて読みませう」

「イエ／＼私に読ませせて下さんせ」

「ハテ、マアおれにも一辺読ませと言うに」

「イエ私が読みますわいな」

「ア、コリヤ、ヤイコリヤそのやうに引張つたら破れるがな。エツ』とかく不孝のわれ等に候へども、死後にはさぞやお二人や、宗岸様の御敷き、随分々々カをつけ、この身に代つて御孝行になされ給はるべく候申残したき事共は数々に候共、涙に字性も見へがたく、あら／＼惜しき筆留申候、ただ／＼お通が事のみ頼み上候この上はなからぬ後のお念仏、南無阿弥陀仏』南無阿弥陀仏々々々々々々」

と読みも終らず宗岸親子。また伏し沈めば、半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ

「初孫の顔が見たいと心に思へど世間の義理で、これまで逢ひも見もせなんだ。かういふことと知つたらば、顔見ぬうちがましであつたなう」

「ライノ愛らし盛りのお通、半七といつしよに暮らすなら、よい楽しみであらうもの」

「こりや孫よ。モウ父も母もないほどに今夜からこの婆といつしよに寝いよ。ア、とはいふもの、乳もなく、今から先の寝起きにも、さぞや歎かん親々が、知らずにあるがエ、胴欲者。むごい心いぢらしや」と言ふ声洩るゝ。三勝が、思はず乳房を握り締め

「乳はここにあるものを、飲ましてやりたい、顔見たい、乳が張るわいの」

と身をふるはせ駈け入らんにも関の戸に、空音もならず羽抜鳥。親は外面に血の涙。子はやすかたの安からぬ。悲しさ迫る内と外。一度に『わつ』と湧き出づる涙。浪花江泉川、小きんを汲み出すごとくなり。半七は歯を喰ひ締め

「かばかり深き御情、是非もなやもつたいなや。不孝

を赦させ給はれかし。いつまで言うても返らぬ繰り言。親父様の御縄目、はやうほどくは身の最期。イザ／＼急がん。さあおぢや」

と立上りしが『今生の別れにせめて御顔を』と、差覗けば、三勝も、『お通を一目』と伸び上り見れども親子へだての関。なんと千万無量の思ひ。両手を合はせ伏し拝み

「おさらば」

「さらば」

と言ふ声も歎きにうづむわが家の内、見返り、見返り死に行く。大和五条の茜染め、いま色上げし艶容。その三勝が言の葉をこゝに、写して止めけれ

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます